

日本看護歴史学会 會報

日本看護
歴史学会
第41号
2003年11月1日

第17回大会

日本看護歴史学会第17回大会を終了して

小山敦代

日本看護歴史学会第17回大会は、さわやかな初秋の9月5日(金)・6日(土)に青森県立保健大学において開催された。テーマは“看取りの文化—古代から現代へ”であり、参加者は179名であった。

ライダー
島崎玲子
大会長挨拶は、はじめに亀山美知子氏の訃報と本学会設立、ならびに永年の代



表幹事や看護歴史研究における多大な功績をたたえられた。そして、本大会は、日本の看護の原点とその変遷をとおして看護の本質とは何かを追及したいという会長としての熱い想いが語られた。続いて、青森県立保健大学の道幸恵学長から歓迎の挨拶があり、第17回大会の幕が開いた。

特別講演Ⅰの松木明知氏(弘前大学)による「八甲田雪中事件—特に第5連隊と第31連隊による捜索活動について—」では、真実を知る観方に迫力があり、科学的な論理的思考と歴史から学ぶことに感銘を受けた内容であった。

パネルディスカッションは、「占領軍GHQ公衆衛生福祉局の医療看護政策と現在への影響」をテーマとし、ライダー島崎玲子氏、大石杉乃氏、川島みどり氏、平尾真智子氏により、GHQによる看護改革が看護実践、看護教育にどのように影響を及ぼしてきたか、それぞれの立場や実践活動、研究を通して語られた内容は興味深く、改めて、看護改革の理念の継承と時代の変遷の中で看護に求められている本質を結びつけて再考する機会になった。

2日目の午後には4分科会が開催され、「看護に関する法律の変遷」「史料の力」「診療報酬の推移と看護の評価」「男性の看護参画」について、各々の会場で、工夫を凝らしたプレゼンテーションと活発な意見交換が行われた。

特別講演Ⅱの新村拓氏(北里大学)による「看取りの文化とその歴史」では、病と死に焦点が当てられ、まさに高齢社会の現在、看護者にとって興味深

く示唆に富む内容であった。また、口演8題、示説6題の一般演題発表と、貴重な写真の展示は、それぞれ関心が高く人を引き寄せた。

本大会は、学生による発表や若い看護師、男性看護師によるセッションなど看護歴史への関心の広がりが見られ、本学会の発展に期待をさせて幕を閉じた。

大会終了にあたり、会員の皆さま、ご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

新刊のご案内

戦後日本の看護改革

封印を解かれたGHQ文書と証言による検証

ライダー島崎玲子・大石杉乃編著

定価8,000円(日本看護協会出版会)

本書はGHQ文書を中心に膨大な史料と関係者の証言に基づき、戦後日本の看護改革を検証する歴史書である。

特別講演Ⅰ

真実への追求30年 — 八甲田雪中行軍事件 —

木村紀美

1902年(明治35年)1月下旬、青森市に駐屯する歩兵第5連隊、第2大隊隊長山口少佐以下210名の将兵は、冬期耐寒訓練のため雪中行軍を開始した。当日は午後から猛吹雪となり行軍の続行が困難との判断から山中に露営し、翌朝午前2時半に露营地を出発した。

しかし、吹雪は益々猛烈となり、周囲は暗く、何も見えずそこから彼らの「死の彷徨」が始まった。遭難から13日目までに凍死者193名と山口少佐を含む生存者17名が発見された。生存者は現場で応急処置を受け衛戍病院に搬送されたが、入院中6名が死亡した。凍傷の応急処置は、記録からみて現代医療に劣るものではなかったという。ただ、この遭難事件の一番の原因が、様々な原因はあるものの指揮者の判断ミスであったと言われる。判断の重要性に関しては、看護職者にとっても同様である。

30年間の月日を費やし、真実を追求していった松木氏の多大な資料に基づいた陸軍省の調査結果報告や山口少佐の死は、自殺とは考えられない、という論証には説得力があった。

松木氏は、真実を知る、記録を辿っていく、記録するということを随所で話されたが、看護の歴史を語る時、また歴史を歩む時もそのことは必須条件であると思った。

